丹波高原につつまれ 人の交流・連携で築く ぬくもりと躍動のあるまち

広報 京丹波

No.8
2006年
6月15日発行

KYOTAMBA TOWN

［特集］水道
蛇口の向こうがわ

CONTENTS

特集・水道「蛇口の向こうがわ」……2～5
シリーズ・地域自治のススメ① ……6
町営バスが運行開始 ……7
福島県双葉町と友好町提携 ……8・9
シリーズ・地域の躍動④ ……10・11
社会を明るくする運動／人の動き ……12
フラッシュ　TOWN NEWS 2006 ……13～15
まちの元気人⑤……16

5月30日、須知幼稚園で行われた「動物ふれあい教室」では、子犬やウサギとふれあう園児たちのあどけない笑顔が、あふれていました。

特集・水道

蛇口の向こうがわ

わちエンジェル

蛇口をひねると、いつでもきれいな水が流れ出てくる水道。
生活の一部として使い、蛇口の向こうがわをあまり気にとめることもありません。
今回の特集では、ライフラインの柱である水道について
みていくとともに、生命の源として、わたしたちの暮らしに
なくてはならい大切な「水」について考えてみましょう。

丹波・瑞穂地区の水道

慢性的な「水」不足が町の発展を制約

丹波地区（旧丹波町の区域）・瑞穂地区（旧瑞穂町の区域）は、丹波高原の分水嶺に位置していることから、これまで生活用や産業用の「水」が十分に確保できず、まちの発展は大きな制約を受けてきました。

とくに生活用水においては、以前はそのほとんどが苦労して掘り当てた個人対応の井戸などで確保されてきましたが、戦後の高度経済成長期とともに人びとの生活様式が大きく変化し、水需要の増加や衛生志向の高まりなどから、個人対応の井戸などでは対応しきれない状況になりました。

こうした問題を解決するため、旧丹波町・旧瑞穂町はそれぞれ簡易水道事業に着手。昭和二十九年、戸津川簡易水道（旧瑞穂町）を先駆けに、昭和六十一年の鎌谷奥簡易水道（同）の完成まで、旧両町で二十一の簡易水道施設を整備してきました。

簡易水道を統合整備

昭和四十年代に入ると、旧丹波町・旧瑞穂町の各地で大規模な住宅団地の整備が進みましたが、両町の簡易水道施設は小規模での運営の集合体であり、住宅団地へ新規給水ができる状態ではありませんでした。

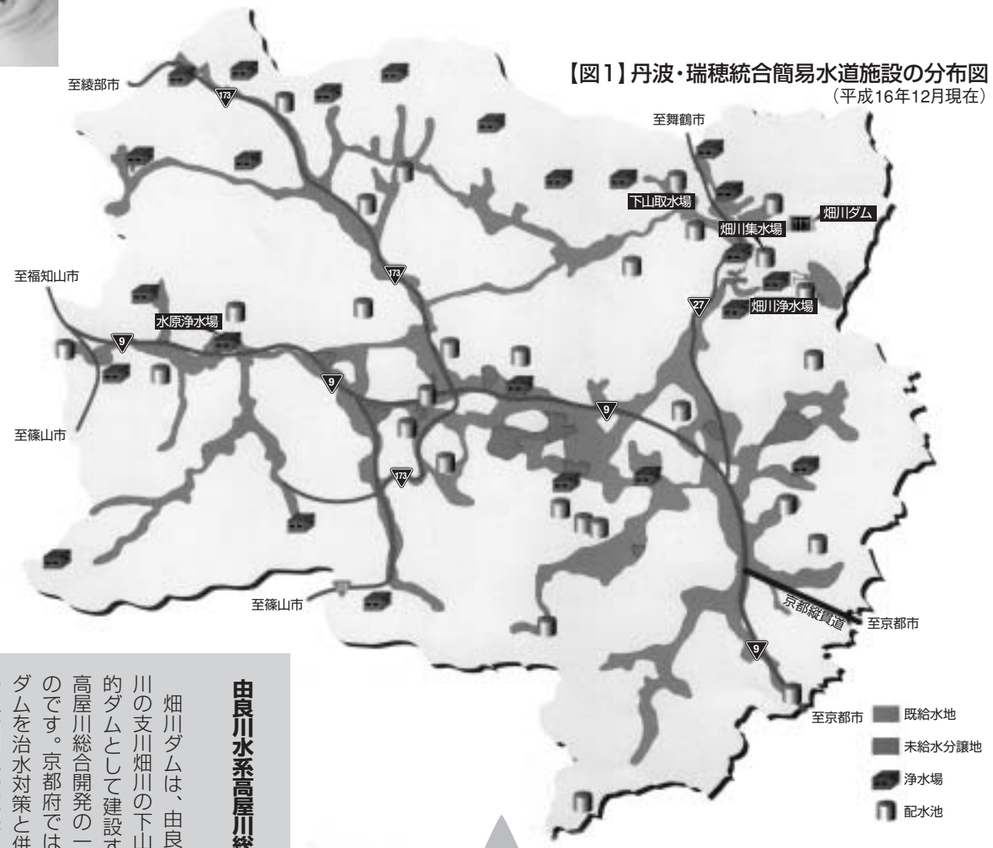
また、下水道の整備や生活が豊かになり、一人当たりの使用水量も大幅に増加。旧両町の水道供給能力は限界に達し、渇水期にはたびたび、時間給水や断水を余儀なくされる状況でした。（表1参照）

このような中、平成八年度、下山地内に京都府営ダム事業の第一号として「畑川ダム」建設着工の採択を受け、永年の悲願であった新規水源の確保が実現することになり、平成九年六月、両町の水道事業の設置、管理および経営に関するすべての事務を共同で整備する一部事務組合「丹波町・瑞穂町水道事業組合」（現水道課）を設立。畑川ダムをはじめとする新規水源の確保とともに、両町の水道施設の統合整備を実施し、「水道水の安定供給」と「未給水区域の解消」の二点を目的に「統合簡易水道整備事業」に着手しました。

特集・水道

蛇口の向こうがわ

【図1】丹波・瑞穂統合簡易水道施設の分布図
（平成16年12月現在）



【表1】渇水被害の状況

発生時期	取水制限などの状況
昭和61年10月	17日間の給水制限 旧丹波町:断水5時間 旧瑞穂町:断水延べ144時間
昭和62年10月	1日間の給水制限
昭和63年11月	35日間の給水制限
平成2年8月	48日間の給水制限
平成6年8月	66日間の給水制限 旧丹波町:断水延べ8時間 旧瑞穂町:断水延べ48時間
平成12年8月	26日間の給水制限

将来にわたる水の安定供給をめざして

現在、旧丹波町・旧瑞穂町の区域で進めている統合簡易水道整備事業は、平成十年度に計画事業費約一六八億円でスタート。これまでに新規水源として下山取水場と水原取水場を確保し、平成十六年九月には畑川浄水場と水原浄水場の二つの新浄水場の通水を開始。住宅団地など多くの未給水区域への給水が可能な状態へとなってきました。（図1参照）

現在の事業の進ちょく状況は、事業費ベースで約六四%。国や府の補助金、起債（借金）などを財源に、事業を実施しています。

安全でおいしく、安心して飲める水を町民の皆様に将来にわたって安定供給していくため、現在、京都府により建設事業が進められている「畑川ダム」を主水源とした統合簡易水道事業の一日も早い完成を目指しています。

由良川水系高屋川総合開発事業 畑川ダムの概要

畑川ダムは、由良川水系高屋川の支川畑川の下山地先に多目的ダムとして建設するもので、高屋川総合開発の一環をなすものです。京都府では、この畑川ダムを治水対策と併せて、地域の生活用水の確保を目的とした「生活関連ダム」として位置づけています。

ダムの形式は重力式コンクリートダム。高さ三四・〇メートル、総貯水容量二〇六万立方メートル、有効貯水容量一六二万立方メートルで、洪水調節、流水の正常な機能の維持および水道用水の供給を目的としています。

同ダムが完成すると、旧丹波町・旧瑞穂町の区域の水道水として新たに、一日あたり五千立方メートルが供給される予定です。

畑川ダム建設現場（下山地内）

和知地区の水道

施設の老朽化と生活水準の変化

和知地区（旧和知町の区域）では、由良川などの豊富な水を活用し、早くから水道施設が普及してきましたが、すべての施設が昭和四十年代前半から五十年代前半に整備したもので、施設も給水管も老朽化が進み、水質の悪化や給水量不足などが懸念されるほか、住宅団地の整備や下水道整備など生活水準の向上による水需要の増加などが問題になってきました。

また、浄水施設のなかには地元運営のものもあり、施設を管理運営する水道補助管理者の高齢化が進み、業務を担うのが困難になってきていることも課題になっていました。

統合整備事業に着手

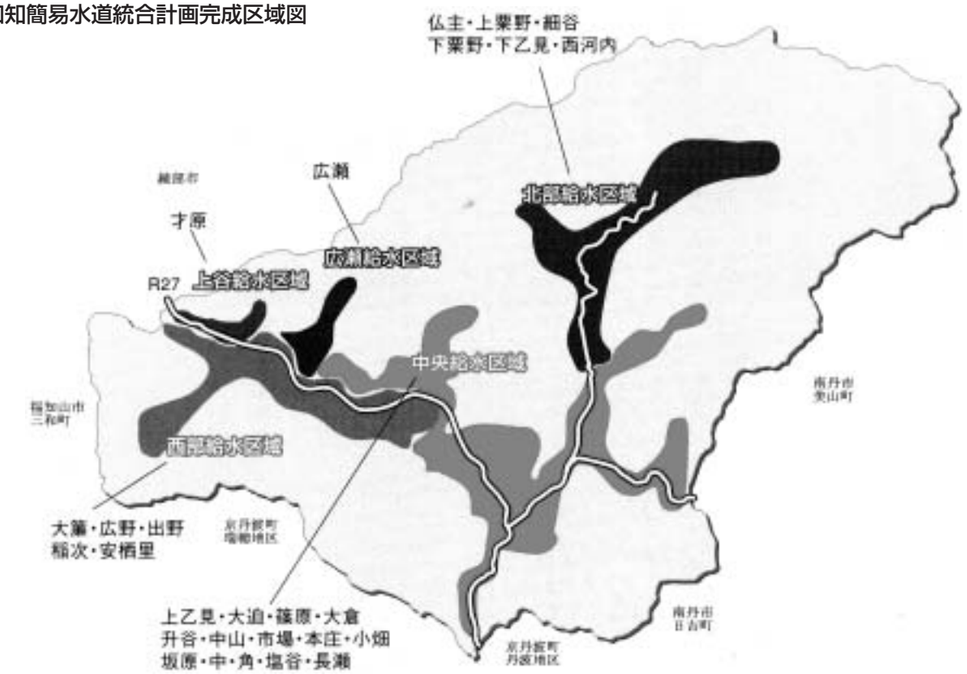
これらの問題を解決するため、旧和知町全域における簡易水道施設と飲料水供給施設の効率化を図り、良質で豊富な水量の確保を目的に、簡易水道施設の統合整備に着手。十四カ所に及ぶ既存の簡易水道施設を七水源、七浄水場・配水系統に統合する「和知簡易水道統合整備計画」を策定し、平成十二年度に事業認可を受け、平成十三年度から計画事業費四十六億円で、事業がスタートしました。

平成十五年度には、当初の整備計画を見直し、既存施設を五水源、五浄水場・配水系統に統合する整備計画に変更しました。

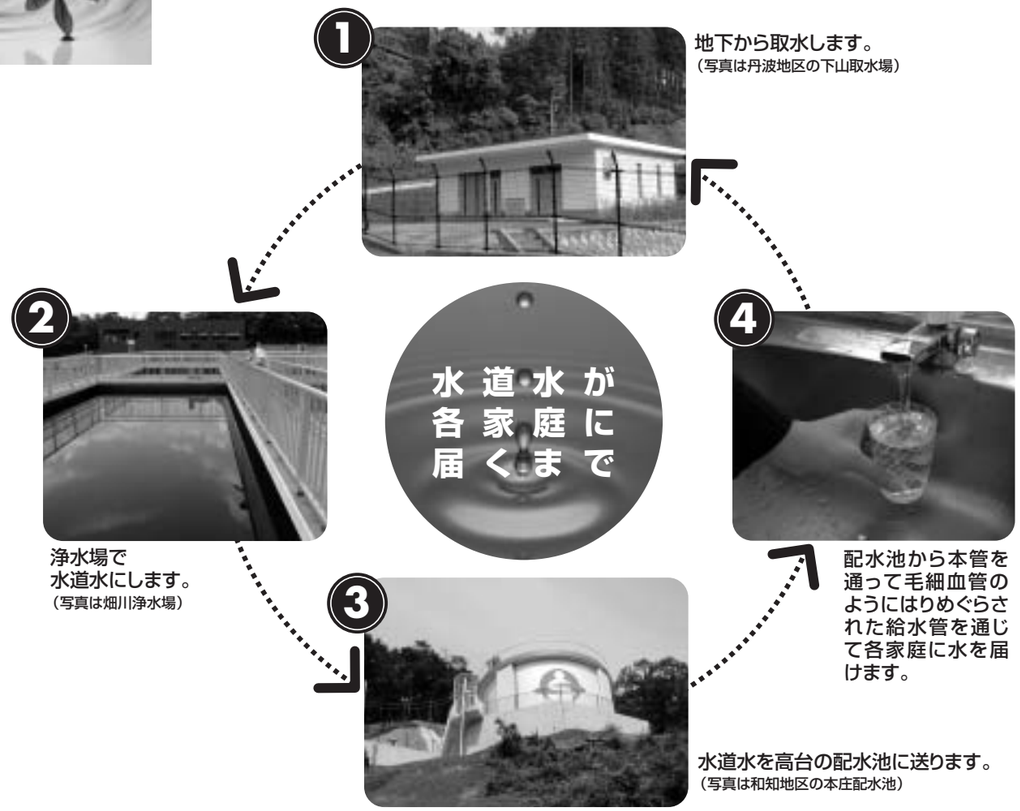
現在の進ちょく状況は事業費ベースで約四六％。平成二十四年度の完成をめざしています。（図2参照）

和知簡易水道中央浄水場（下乙見）

【図2】和知簡易水道統合計画完成区域図



蛇口の向こうがわ



水と環境

使える水は、わずか0・007％

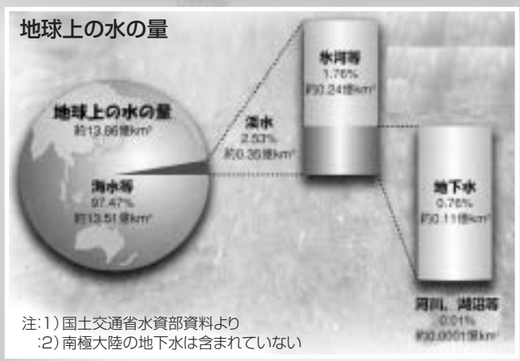
わたしたちが住んでいる地球は「水の惑星」といわれ、地球の表面の70％が約14億立方キロメートルの水で覆われています。このため、「地球にはたくさん水があるのだから、いくら使っても安心だ」と思ってしまいがちですが、じつは地球上に存在する水の97・5％は海水で、淡水（真水）は約2・5％しかありません。しかも、この淡水の大部分は南極などの氷になっていて、地下水を含め、河川水や湖沼水などの淡水は、地球に存在する水全体の1％にも満たないのです。さらに人類が使える水の割合は地球の水全体の0・007％に過ぎません。

このわずかな水も人間が大量に消費し、汚してきたため、世界のあちこちできれいな水がなくなりかけています。地球上には、世界の人口（約64億人）の6分の1にあたる約11億の人びとが安全な水を利用できず、また、トイレがない暮らしをしている人びとは、世界人口の約40％、24億人もいるのです。（厚生労働省発行「数字で見る水道」から引用）

「水」の大切さを考えよう

蛇口をひねればいつでも、どこでも、すぐに流れ出てくる水。飲み水や歯みがき、掃除、洗たく、お風呂、料理など、水を使わない日はありません。このように水は、あまりにも当たり前にわたしたちの身近にあるため、その存在の大切さをついつい見過ごしてしまいがちですが、先に述べたとおり人類が使える水には限りがあります。

生命の源である水を守っていくためには、わたしたち一人ひとりが、水に関心を持ち、ふだんの暮らしのなかで、地球環境にやさしい上手な水の使い方を実践していくことが大切です。六月は「環境月間」。皆さん、大切な「水」のこと考えてみませんか。



注:1）国土交通省水資源部資料より
:2）南極大陸の地下水は含まれていない

シリーズ

地域自治のススメ

「シリーズ・地域自治のススメ」では、「地域自治」による、住民参加と協働のまちづくりについて考えていきます

【第1回】今、なぜ「住民自治」が必要か

近年、各市町村のまちづくりにおいて、「地域内分権」や「住民自治」の必要性が叫ばれ、全国各地で住民参加、情報公開、協働、住民投票など住民自治の視点から必要とされる政策や諸制度を体系化し明確にした「自治基本条例」の制定、「地域自治組織」の構築など、住民自治を強化するためのしくみづくりが積極的に展開されています。

今なぜ、こうした住民自治の確立を柱としたまちづくりが必要なのでしょうか。シリーズ初回は、住民自治とはどういうことで、なぜ必要なのかをみていきます。

地方分権時代の幕開け

これまでわが国は、権限と財源を国に集中し、地方自治体をコントロールする「中央集権型」の行政システムをもとに着実な発展を遂げてきました。日本を近代化し、先進諸国の仲間入りを果たすためには、中央集権型の行政システムが効果的であったといえます。

しかし、高度経済成長期を経て、一定の経済的な成長を遂げた現在、多様化する住民ニーズを踏まえた地域づくりや、少子・高齢化への対応など、成熟した社会が直面するこれらの課題に、画一性、効率性を重視する中央集権型行政システムでは、対応が困難な状況になってきました。

こうしたことを背景に近年、わが国では、国と地方を対等・協力の関係に見直すとともに、これまで国に集中していた権限や財源を地方自治体（都道府県・市町村）に移し、地域のことは、地方自治体が自主性・自立性をもって、自らの判断と責任のもとに地域の実情や住民のニーズに合ったまちづくりを行う「地方分権」が進んでいます。

「住民自治」の必要性

このように地方分権が進むなか、全国の自治体では、「住民自治」の重要性が高まっています。

「住民自治」とは、まちづくりに広く住民が参加し、地域住民と自治体とが地域課題を「共に考え」、解決に向けて「共に行動する」ということです。

成熟化した社会のなかで、地方自治体は、多様化する住民ニーズへの対応、少子・高齢化や過疎化により減退していく地域活力の維持、市町村合併により広域化した地域全体の振興策など、さまざまな課題を抱えています。

しかし、財政事情が厳しさを増す今の地方自治体では、これらの課題すべてに対応していくのは不可能といわざるを得ない状況です。

地方分権時代におけるこれからのまちづくりには、地方自治体の行政能力と健全な財政基盤の確立や強化（団体自治の強化）が必要なことはいうまでもありませんが、併せて、行政と住民が地域課題の解決を共に行う、「住民参加と協働」による住民自治の推進（住民自治の強化）が必要になります。

合併により広域化した本町にとっても、地域全体の振興を図っていくうえで、住民自治の推進は必要不可欠な要素です。町民、NPO法人（特定非営利活動法人）、ボランティアグループなど地域を構成するさまざまな主体と行政とが、地域の課題解決に向けて担い得る役割をそれぞれ分担し、協働してまちづくりを行っていくことのできるしくみの構築が必要となっています。

丹波クリーン作戦。町の美化に汗を流す参加者（国道９号、役場前付近）

5月1日 町営バスが運行開始

京丹波町町営バスが五月一日から運行を開始。同日の朝、町中央公民館前で行った出発式には、町民や議員、町関係者など約五十人が出席し、運行開始を喜び合いました。

これまで旧町域ごとに行っていた町営バス、町民バスの再編は、合併後の最優先課題として取り組み、三月議会定例会で京丹波町町営バス運行事業条例が可決成立。旧三町を結ぶ路線など全十五路線に再編しスタートしました。

（時刻表、料金表など詳しくは四月十五日発行の「広報京丹波 №6」をご覧ください。）

出発式でテープカットを行う松原町長ら（町中央公民館前）

丹波地区・森付近

◆出発式を開催

式では、松原茂樹町長が「安全を最優先に、町民の皆さんにとって安全で快適な町営バスの運行に努めていきたい」とあいさつ。次に岡本勇議長があいさつしたあと、瑞穂地区区長会長の谷勝彦さんが「念願だった町営バス運行が始まりうれしい。町民に愛され、利用されるバスとして充実していくことを願う」と謝辞を述べました。

続いて、松原町長、岡本議長、谷勝彦瑞穂地区区長会長がテープカットを行い、最後に、式に出席した町民を代表して吉田あやのさん（本庄）から三好稔運転手（企画情報課）に花束が渡されました。

◆全十五路線でスタート

旧瑞穂町・旧和知町の町営バス路線をほぼ現行のとおり残し、旧三町を結ぶ路線として丹波桧山線、丹波和知線の二路線を新設し、旧丹波町の町民バス路線を竹野線、高原下山線とするなど全十五路線に再編して運行を開始。再編にあたっては、利用者の利便性向上のため、町内の官公庁や病院、商業施設を結び、JRバス路線と重ならないよう配慮しました。

料金についても、三・五キロ未満を百円、三・五―七キロ未満を二百円、七―十キロ未満を三百円、十キロ以上を四百円とする新体系を設けました。

各路線の便数・時刻などは今後、運行状況をみながら見直しを行っていきます。

5月の町営バス利用者数

路線名	利用者数（人）		
	一般	生徒学生など	計
丹波和知線	664	3,455	4,119
丹波桧山線	52	2,300	2,352
高原下山線	162	2,637	2,799
竹野線	50	0	50
小野鎌谷線	425	869	1,294
猪鼻戸津川線	340	612	952
質美線	784	1,564	2,348
仏主線	433	760	1,193
長瀬線	509	720	1,229
才原大簾線	146	2,240	2,386
上乙見線	39	1,920	1,959
合計	3,604	17,077	20,681

インタビュー

安村さん（角）

買い物に出かけるとき、町営バスを利用しています。わたしにとっては、バスが唯一の交通手段なので、合併後、バス路線がどうなるのか心配していましたが、五月一日から運行が始まり、安心しています。

いつも、和知駅から道の駅「丹波マーケス」までの便（丹波和知線）を利用しています。バス停をあちこち巡回するため、長い時間バスに乗っていなければならず、「じれったいなあ」と思うこともありますが、料金体系が分かりやすく、とても安い料金で利用できるのはうれしいですね。最初は、あまりの安さに驚いていました。

福島県双葉町と友好町提携

昭和45年大阪万国博覧会でのテレビ対談をきっかけに
旧瑞穂町が姉妹町交流をしていた福島県双葉町と、
このほど、友好町提携の盟約を交わしました。

盟約書に署名し、握手を交わす井戸川町長（左）と松原町長（右）

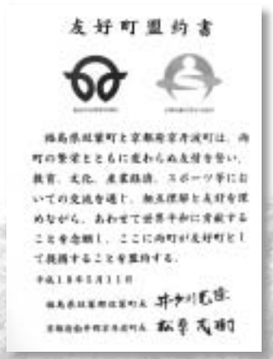
さまざまな分野での交流を約束

五月十一日、東京都千代田区の厚生会館ホテルで友好町提携盟約書調印式を行い、井戸川克隆・福島県双葉町長と松原茂樹・京丹波町長が盟約書に署名。両町長が固い握手を交わし、盟約を締結しました。

その後、両町長は終始なごやかなムードで、それぞれの町の現状やまちづくりの課題、今後の交流などについて意見を交わしました。

福島県双葉町とは旧瑞穂町が、昭和四十五年に開かれた大阪万国博覧会で、日本電信電話公社（現在のＮＴＴ）が企画したテレビ対談「あなたの町、わたしの町」に両町長が出演したことをきっかけに交流を始め、平成六年に正式に姉妹町提携の盟約を締結。農業青年後継者の交流や行政視察、小・中学生が交流する「姉妹町子ども交流会」など、さまざまな分野で交流を育んできました。

今回の友好町提携の盟約は、合併に伴い京丹波町として改めて締結したもので、今後、産業や文化、教育などさまざまな分野で交流を深め、両町の発展につなげていくことを確認しました。



友好町盟約書

福島県双葉町と京都府京丹波町は、両町の繁栄とともに変わらぬ友情を誓い、教育、文化、産業経済、スポーツ等において交流を通じ、相互理解と友好を深めながら、あわせて世界平和に貢献することを念願し、ここに両町が友好町として提携することを盟約する。

平成18年5月11日

福島県双葉郡双葉町長　井戸川克隆

京都府船井郡京丹波町長　松原茂樹

福島県双葉町の紹介

双葉町は福島県浜通り地方・双葉郡の北東部に位置。面積は五一・四〇平方キロメートル（本町の六分の一）で、人口・世帯数（平成十八年四月一日現在）は、七、二五九人、二、四三七世帯。西には阿武隈山系がつらなり、東は太平洋に面しています。気候は海洋性で比較的温暖。積雪はほとんどありません。

昭和四十二年、東京電力（株）福島第一原子力発電所の建設が地域の産業構造に変化を与え、町民の生活環境も整備され、自然と調和のとれた豊かなまちへと発展しています。また、旧石器時代から近世にかけての史跡が数多く残り、「清戸さく装飾横穴墓」の壁画は国の指定史跡になっています。

双葉町のまち並み

【ダルマ市】

ダルマ市は、江戸時代から伝わる新春恒例の伝統行事。毎年一月の第二土・日曜日に行われます。縁起物のダルマをはじめ、豊作を祈る飾り物、特産物などの露店が立ち並び、「巨大ダルマ引き合戦」がにぎわいをみせる新春の祭りで、町内外から多くの人びとが訪れ、まちは活気にあふれます。

【双葉海水浴場】

夏には海水浴客でにぎわう双葉海水浴場。町営の海の家「マリーンハウスふたば」にはシャワーやトイレ、休憩室が完備。快適な夏の一日を満喫できます。また、隣接する双葉海浜公園も夏のリゾートゾーンとして親しまれています。公園内には宿泊施設として三棟のログハウス、九十二区画のキャンプ場や遊歩道、バーベキューガーデンなどがあり、アウトドアを満喫できます。

【ミニ野馬追神旗争奪戦】

東北地方の代表的な祭りのひとつで、旧相馬藩に属する市町村一帯で行われる「相馬野馬追（のまおい）祭」（七月下旬開催）。これに出陣した双葉町騎馬隊が、町を凱旋したあと、町民グラウンドで野馬追（のまおい）神旗（しんき）争奪戦を行います。目の前で繰り広げられる争奪戦の迫力に人びとは魅了されます。

シリーズ・地域の躍動④

史跡整備で地域おこし

町立三ノ宮小学校の裏山はかつて、戦国時代の武将・山内一豊の祖先が居城したと伝わる三之宮城が築かれていた城山。地元の八集落の区民でつくる三ノ宮地域振興会が、平成十七年四月、この城山を舞台とした地域づくりに乗り出した。

また、上豊田区民らでつくる「豊友会」（山本修会長）も、平成十七年十二月、同区を、一豊が再興した土佐山内家ゆかりの地としてPRし、地域の活性化につないでいくため動き出した。

小雨の中、遊歩道整備に汗を流す会員

山頂からの眺め

城山山頂

戦国武将ゆかりの地を地域おこしへ

町立三ノ宮小学校の裏山、ここにはかつて、土佐（高知県）二十四万石の国主となった戦国時代の武将・山内一豊（一五四六―一六〇五年）の祖父久豊、父盛豊が居城したと伝わる「三之宮城」が築かれていた。

地元三ノ宮地域の八集落の区長や財産区、公民館、女性会や老人クラブなど二十九人で構成する三ノ宮地域振興会が平成十七年四月、この城山の整備に着手。きっかけは、山内一豊の生涯を題材にしたNHK大河ドラマ「功名が辻」が平成十八年一月から放映されるとの一報であった。

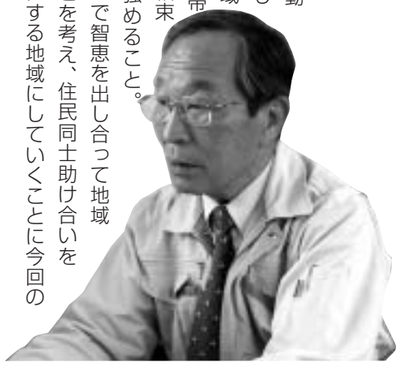
同協議会は、三ノ宮地域を「一豊公ゆかりの地」としてPRし、地域おこしへとつないでいくため、城山の整備と併せて、三之宮城や同城に居城したとされる山内氏の系譜などの文献調査にも乗り出した。

「城山は、この地域の人なら一度は、小学校時代に登ったことがあり、幼少時代の遠い記憶を思い起こさせてくれる懐かしい場所でもある。城山の整備はこれまで、地域の諸先輩が思いを寄せてきたことであったが、昔は、山林の価値が高かったことなどから、なかなか着手できなかった」と同振興会長の田畑修一さん（水呑）。「NHK大河ドラマの放映をきっかけに、委員の間で城山整備の話が持ち上がった。近年の山林状況の変化や、地権者の了解など条件もそろい、城山整備に着手できた」と振り返る。

手づくりの城山整備

平成十七年八月、三ノ宮地域振興会の委員らが城山整備を開始した。約二カ月かけて山頂周辺の立木伐採に汗を流し、十月二十三日には、振興会委員二十五人が遊歩道を整備。冷たい雨が降るなか、登山道に丸太を敷き、くいを打ち込んだ。

その後、近くの国道一七三号を行きかう車などにPRするため、「一豊公ゆかりの地


田畑修一会長（水呑）

の活動を通じて地域の連帯感や結束力を強めること。みんなで智恵を出し合って地域のことを考え、住民同士助け合いを大切にする地域にしていくことに今回の取り組みの意義がある」と力を込める。

「城山が地域住民の憩いと交流の場になれば」と田畑会長。同振興会では今後、文献調査結果をまとめた冊子四百部を地域の全戸に配布し、さらに城山を舞台として、地域の子どもや高齢者がふれあう「城山まつり」（仮称）などのイベントを行い、地域コミュニティの向上につないでいくという。城山を舞台とした次なる地域づくりが、もう動き出している。

【三之宮城と山内氏】

三之宮城は、山内一豊から数えて十三代前の宗俊の二子、俊家と時俊の間に争いがおこり、敗れた俊家が丹波国三宮（京丹波町三ノ宮）へ移り、土佐山内家の祖となったと伝えられている。山内一豊の父盛豊は明応九年（1500年）ごろ丹波で生まれ、三之宮城に居城したとも伝えられている。

三之宮城跡」と書いた大看板を設置。これらの整備と平行して、同振興会委員や地元区民、学識経験者など十一人で専門委員会を設け、三之宮城や山内氏系譜などの文献調査も行った。

「自分たちが住む地域には、こんな立派な史跡があるんだということを、地域住民が共有し、次代へと伝えていくため、三之宮城や山内氏の歴史などをきちっと調査し、記録として残していかなければならない」と、振興会委員で文献調査専門委員会メンバーのひとり、小山満さん（三ノ宮）。専門委員会のメンバーは、山内氏の系譜が残る区内の家や、京都市内の資料館、滋賀県内の図書館へも足を運び、史料収集に奔走した。

今年二月、山頂に三之宮城の歴史や城郭の概要などを記した木製の案内看板を設置。三月には山頂に休憩ベンチなどを作り、約半年かけて委員らが力を注いできた手づくりの城山整備が完成した。

城山を地域コミュニティづくりの舞台に

整備された城山の頂上からは、南丹市との境にある観音峠まで望むことができる。その眺望からは、当時の武者が敵の来襲を警戒している様子が浮かんでくる。

「この城山が三ノ宮地域のシンボルになれば」と小山さん。田畑会長は「今回の最大の目的は、城山整備の力を通じて地域の一体感や結束力を強めのみんなで智恵を出し合って地域のことを考え、住民同士助け合いを大切にする地域にしていくことに今回の

小山満さん（三ノ宮）

上豊田の「豊友会」一豊ゆかりの地PRで地域の活性化

上豊田区民らでつくる「豊友会」（山本修会長）は、NHK大河ドラマ「功名が辻」の放送をきっかけに、主人公の山内一豊が再興した土佐山内家の先祖が住んでいたとの説がある同区一帯をPRし、地域おこしにつないでいこうと平成十七年十二月に動き始めた。

同区には「山内」の地名が残っており、江戸時代の儒学者・貝原益軒の「西北紀行」には、紅井村（豊田）の南にあたる印内村と中尾村（中台）の間に「山内村あり。これ土佐大守山内氏の先祖の住めりし所なり」との記述があるなど、一豊の先祖が住んでいたとの説がある。

豊友会のメンバーたちは今年二月、土佐山内家ゆかりの地をPRするため、約一週間かけて縦三メートル、横七十センチの大看板（写真中央）を制作。上豊田住民センターの向かいに立てた。二月十一日には同会のメンバーらで看板の除幕式を行った。

文献調査にあたったのは同会のメンバーの野口正利さん（豊田）。野口さんは約二十年も前から調査にあたっていたという。「この地域が、土佐山内家先祖の地である可能性が高いと思えるようになるまで、調査にかなりの時間がかかったが、今後、一豊公ゆかりの地としての浸透を図り、地域振興につなげていきたい」と野口さん。山本修会長（院内）は、「これを機に住民の地域への誇りと愛着を育み、活性化させていきたい。同じ一豊公ゆかりの地である三ノ宮地域とも連携し、取り組みを進めていければ」と話していた。

大看板を眺める山本会長（右）と野口さん（左）（上豊田地内）

●第56回社会を明るくする運動●

ふれあいと対話が築く明るい社会

社会を明るくする運動って？

すべての国民が、犯罪や非行の防止と罪を犯した人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪や非行のない明るい社会を築こうとする全国的な運動です。

いつ行っているの？

7月を強調月間として、年間を通じて行っています。

どんなことをやっているの？

(1) 更生保護制度への理解と協力を呼びかける活動
(2) 子どもたちの健全な成長を支援する活動
(3) 地域のネットワークづくり

具体的には、運動の趣旨や活動への協力を呼びかける街頭啓発、少年非行の問題を考える「フォーラム」、子育てなどの身近なテーマや地域の問題を取り上げた「ミニ集会」、親子で参加できるワークショップなどがあります。

なんだか難しそう・・・

そんなことはありません。行事に参加する以外にも、日々の生活のなかでも実践できることはたくさんあります。

- 相手の気持ちを理解すること
- 子どもをぎゅっと抱きしめること
- どんどんあいさつをすること
- 偏見を持たないことなど

明るい社会づくりのために、
まずは「身近なところから」
「できることから」
運動に参加してみませんか。

問い合わせ先／
企画情報課
電話82−3801

KYOTAMBA TOWN 人の動き

（敬称略）

■職員の人事異動

六月一日付けで、次のとおり町職員の人事異動を行いました。

【異動】（ ）は前任。

議会事務局長・伊藤康彦（税務課長）
▼総務課長・谷俊明（議会事務局長）
▼税務課長・岩田恵一（土木建築課）
▼土木建築課長・松村康弘（教育次長）
▼教育次長・長谷川博文（総務課長）
▼企画情報課課長補佐兼人権政策係長・梅原昇治（企画情報課課長補佐）
▼総務課財政係長・松山征義（税務課賦課係長）
▼総務課財政係主任・竹内健（総務課消防防災係長）
▼総務課消防防災係長・片山健（教育委員会学校教育課学校教育係長）
▼税務課賦課係長・中井伸幸（保健福祉課福祉係長）
▼保健福祉課福祉係長・川嶌勇人（総務課財政係長）
▼和知診療所主任・四方晴美（教育委員会社会教育課文化財係長）
▼産業振興課商工観光係長・中川豊（丹波食彩の工房主任）
▼産業振興課商工観光係主任・片山利枝（和知診療所主任）
▼丹波食彩の工房主任・太田創一（瑞穂支所地域振興室農林担当主任）
▼教育委員会学校教育課学校教育係長・豊嶋浩史（教育委員会瑞穂教育分室主任）
▼教育委員会社会教育課文化財係長・山崎哲夫（産業振興課商工観光係長）
▼教育委員会瑞穂教育分室主任・小谷誠之（企画情報課人権政策係長）
▼住民課主査・光枝三千代（和知支所地域総務室主査）
▼保健福祉課主査・吉田敦美（瑞穂支所地域総務室主査）
▼土木建築課主査・西野菜保子（瑞穂支所地域総務室主査）
▼和知支所地域総務室主査・山西博美（住民課主査）
▼税務課主事・下村邦喜（瑞穂支所地域総務室主事）
▼住民課主事・上原康宏（保健福祉課主事）
▼住民課主事・井口理恵（和知支所地域総務室主事）
▼産業振興課主事・西山宏明（住民課主事）
▼瑞穂支所地域総務室主事・細野江梨子（税務課主事）
▼瑞穂支所地域振興室主事・山本智之（総務課主事）
▼和知支所地域総務室主事・羽生田真由（住民課主事）
▼教育委員会学校教育課主事・大秦学（産業振興課主事）

フラッシュ TOWN NEWS 2006

胸打つ伝統の響き DONと来い・丹波八坂太鼓

恒例の丹波八坂太鼓保存会（村上薫会長）の「第八回DONと来い・丹波八坂公演」が四月三十日、旧須知小学校講堂で行われ、町内や京阪神などから約三百人が来場しました。

オープニングでは、丹波八坂太鼓発祥の地である下山地区の下山小学校太鼓クラブの子どもたちが日ごろの練習の成果を披露したあと、丹波八坂太鼓保存会のメンバーが伝統曲の「八坂」や、リズミカルな新曲「サバンナ」など七曲を息の合った演奏で披露。訪れた人びとは、勇壮な響きと保存会のメンバーたちの華麗なバチさばきを楽しんでいました。

京丹波町発足後初めてとなったこの日の公演には、和知地区の和知太鼓保存会（野間和幸会長）のメンバーによる和知太鼓も披露され、迫力ある演奏が華を添えました。

胸打つ響きと華麗なバチさばき（旧須知小講堂）

春の山野草に心なごむ

五月四日、五日の二日間、わち山野草の森（坂原）で恒例の「春の森まつり」が開催され、町内外から約千人が来場。春の山野草展や、山野草の寄せ植え教室などが行われ、園内に咲く花や山野草が訪れた人びとの目を楽しませていました。

また、つきたてのヨモギもちの販売や山菜・山野草てんぷらバイキングなどもあり、訪れた家族連れなどが舌鼓を打っていました。

春の山野草を楽しむ来場者（わち山野草の森）

春まつりで鍾乳洞にぎわう

五月四日、質志鐘乳洞公園（質志）で恒例の春まつりが開催され、町内外から六百人余りが来園。地元の質志区民らによるタケノコごはんや山菜てんぷら、山菜入りの「鍾乳洞うどん」の出店やフリーマーケットなどがあり、訪れた家族連れなどが地元産の旬の食材に舌鼓を打ったり、鍾乳洞探索やキャンプを楽しんだりして、ゆったりと連休のひとときを過ごしていました。

自然のなかでゆったりと過ごす家族連れたち（質志鍾乳洞公園）

道の駅「瑞穂の里さらびき」来場者百万人を突破

五月三日、グリーンランドみずほ内の道の駅「瑞穂の里・さらびき」（大朴）の来場者が、平成十一年四月のオープン以来、百万人を突破。百万人目の来場者となった関正俊さん（大阪府四条畷市）に、同道の駅を運営するグリーンランドみずほ株式会社の黒田一夫・代表取締役などから記念品が贈られました。

同道の駅では、来場者百万人突破を記念して、この日から五日までの三日間、感謝祭が行われ、町内外から約六千人が来場。「昔なつかしい縁日の再現」をテーマにさまざまな屋台が立ち並んだほか、お楽しみ抽選会なども催され、にぎわいをみせていました。

入場者100万人目となった関さん一家（道の駅「瑞穂の里」さらびき

初心者もホッケーでさわやかな汗

第一回京丹波町ホッケーフェスティバルが四月二十九日、グリーンランドみずほホッケー場で行われ、小学生から社会人チームまで四十チーム、約四百人が熱戦を繰り広げました。

この大会は、町内外のホッケー仲間が集い、競技力の向上と普及を目的に、旧瑞穂町ホッケー協会などが毎年この時期に行っていたもので、今年三月に発足した京丹波町ホッケー協会（西村明男会長）がこれを引き継いで開催。小中学校の部には町内はもとより、近隣の県からの参加もあり、子どもたちは保護者らの声援を受け、日ごろの練習の成果を発揮していました。

また、一般の部には、スポーツ少年団の保護者や職場の同僚らでつくったチームなどが参加。初めてスティックを握る初心者の姿もあり、わきあいあいとした雰囲気でさわやかな汗を流していました。

成績は次のとおり（優勝のみ）

小学男子の部／郡家（ぐんけ）西スポーツ少年団（鳥取県）
小学女子の部／春照（すいじょう）ホッケースポーツ少年団（滋賀県米原市）
中学男子の部／篠山市中学校ホッケー部（兵庫県篠山市）
中学女子の部／蒲生野中学校
一般男子の部／ボアーズ
一般女子の部／チェリーズ

ゴールへ向かって懸命のドリブル（グリーンランドみずほ）

区民の力で安全な地域づくり

五月八日、下大久保区の文化教育センターで「長寿社会対策パイロット地区事業」と「高齢者交通事故防止モデル地区事業」の委嘱式が行われ、同区民や南丹警察署員ら十五人が出席しました。

この事業は、京都府警などが取り組む事業で、高齢者世帯や交通量などが比較的多い地域をモデル地区として指定し、その地域での重点的な高齢者交通事故防止や防犯対策を図り、安全で住みよい地域社会づくりを推進することを目的としています。

式では、はじめに野口武英・南丹警察署長が、推進委員として同事業の推進にあたる区民十人に委嘱状を交付したあと、「下大久保を発信基地として、皆さんの取り組みが全町に広く普及・浸透し、安全で住みよい地域づくりにつながることを願う」とあいさつ。次に、推進委員を代表して西田幹雄さんが「区内では独居老人が増えている。『目くばり』『心くばり』に心がけ、区民の力で安心安全な地域づくりに努めていきたい」とあいさつしました。

下大久保区は昨年度も同事業の指定を受けており、二年連続の指定。この日、委員らは早速、南丹警察署員らと共に区内の高齢者宅などを訪問し、防犯や交通安全を呼びかけました。

高齢者宅を訪問する推進委員ら（下大久保地内）

軟式野球で小学生ら熱戦

四月三十日、丹波ひかり小学校グラウンドで「第一回京丹波町体育協会長杯争奪スポーツ少年団軟式野球大会」が行われ、町内の軟式野球スポーツ少年団八チームが参加。日ごろの練習の成果を発揮し、熱戦を繰り広げました。

同大会は、少年野球の普及や活性化、スポーツ少年団員相互の交流などを目的に開催。子どもたちは、応援にかけつけた保護者らの声援を背に、懸命に白球を追いかけていました。成績は次のとおり。

優勝／須知ビクトリーズ
準優勝／下山ストロング
三位／ゴンターズ高原

小学生たちが熱戦を展開（丹波ひかり小グラウンド）

古式ゆかしき八坂神社御田祭

恒例の京都祇園八坂神社の御田祭が五月二十八日、下山尾長野地区で行われました。この行事は、八坂神社の御分社である尾長野区の神せん田で毎年この時期に行われている同区の伝統行事。

参加した区民や同神社関係者など約二百人が見守るなか、すげがさに着物姿の早乙女八人が田植えを行ったあと、同神社青年部による獅子舞や雅楽に合わせた巫女の舞、丹波八坂太鼓保存会による和太鼓演奏が披露され、参加者の目を楽しませていました。

一列に並んで、ゆっくりと苗を植える早乙女たち（尾長野地内）

丹波みらい研究会新しいスタート

町内の若手でつくるまちづくりグループ「丹波みらい研究会」が四月二十七日、会員ら約三十人が出席し、NPO法人（特定非営利活動法人）の認証取得に向けた法人組織の設立総会を丹波町商工会館で開催しました。

同研究会は平成十六年二月、町内の若手が「多くの人が集まるまちづくり」を目指して結成。とりわけ町内の名勝・琴滝の観光開発にスポットを当て、これまで琴滝の環境保全やホタルの繁殖事業に取り組んできました。

昨年十二月には琴滝を舞台に、約五万灯のLEDを使ったイルミネーションイベント「冬ほたる」を開催。町内や京阪神から一万人近い人びとが訪れる魅力あふれるイベントを手がけてきました。

この日の総会では、理事長に岩崎栄喜雄さん（須知）が選出されたほか、定款や、「冬ほたる」の開催などを盛り込んだ事業計画、役員などが決まりました。

岩崎理事長は「人が通過するまちから脱却して、多くの人が集まるまちを目指し、会員が心をひとつにして明日からの取り組みに力を注いでいきたい」と決意を述べました。

あいさつをする岩崎理事長（丹波町商工会館）

ウッディパルが十周年で来場四万人を達成

下粟野区にあるコテージやキャンプ場を備えた自然体験施設「ウッディパルわち」が五月六日、平成八年五月のオープン以来、来場者四万人を達成。四万人目の来場者となった京都市伏見区の松本好剛さんに、施設を運営するウッディパルわち管理委員会（榎本藤雄委員長）から記念品が贈られました。

五月二十八日には、同園のオープン十周年イベントが行われ、区民や同区の出身者など約百人が参加。バーベキューやグラウンドゴルフなどを楽しみながら、十周年の節目を喜び合いました。

あいさつをする川邉哲・下粟野区長

丹波自然運動公園の管理者が同公園協力会へ移行

指定管理者制度の導入に伴い、府立丹波自然運動公園の管理者が、京都府公園公社から財団法人京都府立丹波自然運動公園協力会（横山義雄理事長）へ六月一日付け移行されました。

指定管理者制度は、公の施設の管理に民間の能力を活用しつつ、住民サービスの向上や経費の削減など図ることを目的とした制度で、地方公共団体から指定を受けた者（企業や社会福祉法人などの公益法人、NPO法人、その他法人格を持たない団体など）が施設の管理運営を代行します。

同協力会はこれまで、京都府公園公社から一部の業務委託を受け、宿泊施設の管理や園内の清掃整備などを行ってきましたが、六月一日からは窓口業務を含め、公園の施設管理全般を行っています。

指定管理者制度により管理者が変わった丹波自然運動公園

町区長会を開催

町の八十五行政区の区長の代表（丹波地区十人、瑞穂地区八人、和知地区七人の計二十五人）で構成する京丹波町区長会の今年度第一回の会合が五月一日、役場議場で行われ、今年度の役員などが決まりました。

■区長会役員（敬称略）

会長／谷勝彦（瑞穂地区区長会長、質美中村）
副会長／寺坂久二男（丹波地区区長会長、富田）
▼吉田昭（和知地区区長会長、本庄）

まちの元気人 5

ふだんからの心がけは お客様とのコミュニケーション

大田輝夫さん（68歳）　下粟野

「お客様が安全に楽しく過ごしていただける環境づくりに心がけています」と話すのは、「ウッディパルわち」の管理人を務めている大田輝夫さんだ。

ウッディパルわちは、コテージや研修棟、キャンプ場などを備えた宿泊施設で、都市住民に和知の自然に親しんでもらうとともに、地元住民との交流を育み、地域活性化を図ることを目的に、旧和知町が下粟野区に建築。平成八年五月にオープンした。以来、和知の豊かな自然を感じながらのんびりと余暇を過ごせる場所として町内や京阪神から訪れる家族連れなどに親しまれ、このほど来場者が四万人を突破。施設も十周年の節目を迎えた。

施設の運営は、オープン当初から下粟野区民でつくる「ウッディパルわち管理委員会」（榎本藤雄委員長）が行い、同委員の大田さんが管理人として日々の施設管理にあたっている。「どうしたら多くの人に利用してもらえるか、これまで委員会では試行錯誤を繰り返してきました」と大田さん。家族連れが多いことから、子どもが楽しめるアマゴつかみや農作物の収穫体験など色々と創意工夫を凝らし、委員全員が協力してよりよい施設運営に汗を流してきたという。

大田さんが普段から心がけていることは「お客様とのコミュニケーション」。「お客様に心安く声をかけ、親しみやすい雰囲気をつくっていくことが大切です」と大田さん。「色んなお客様と出会い、話をするのがわたしの楽しみでもあります」とやさしい笑みを浮かべる。大田さんの気さくで大らかな人柄は、ウッディパルわちの魅力でもある。「おっちゃん、今年も来たで」と、なじみのお客さんが増えていくのが何よりもうれしいと話してくれた。

「お客様に、楽しい休日のひとときを気持ち良く過ごしていただくために」と、園内の掃除やこまめな草刈りなど施設の美化にも余念がない。

もうすぐ夏。ウッディパルの季節がやってくる。「さあ、これから忙しくなりますよ」と、そよ風が舞う園内を見渡しながら大田さんが話したそのとき、宿泊予約の電話が鳴った。

編集後記

今回は夏本番を前に、水道を特集。六月が「環境月間」ということもあり、「水と環境」の話も交えて紹介しています。頭では分かっていても、なかなか実践できない環境への取り組み。「洗たくには風呂の残り湯を使う」とか、「車はバケツ洗いで行う」など小さな心がけかもしれませんが、身近にできることを自分なりに見つけて実践していくことが大切ではないでしょうか。

▼職場では六月十二日から「クール・ビズ」を実践中です。これはノーネクタイや軽装で勤務することでエアコンの温度設定を高め、省エネルギーや温室効果ガスの削減につないでいこうという取り組みです。九月まで職員は軽装で勤務しますが、ご理解ください。（Y）

前号の広報京丹波（第七号、五月十五日発行）の十ページ、「各種団体の設立」京丹波町婦人会の副会長／小田喜子さん（本庄）は、庶務／小田喜子さん（本庄）の誤りでした。お詫びして訂正します。

わたしたちの町

人口	17,758（−22）
男	8,446（− 8）
女	9,312（−14）
世帯数	6,507（＋ 5）

6月1日現在／（　）は前月比

発行／京丹波町　〒622-0292京都府船井郡京丹波町蒲生八ツ谷62番地6　電話(0771)82-0200（代表）・(0771)82-3801（直通）　企画・編集／企画情報課
［ホームページアドレス］http://www.town.kyotamba.kyoto.jp　［電子メール］kikaku30@town.kyotamba.kyoto.jp